

（佳作）

自然破壊とその対策

札幌市立藤舞中三年

佐藤 千春

今、地球上では年々、日本の本州の半分にあたる一三〇万ヘクタールの緑が消えてゆくそうだ。米政府は「西暦二〇〇〇年までに、世界の森林は一九七八年に比べ、約一七％も減少する」と予測している。

そこで国連食糧農業機関（FAO）は、一九八五年を「国際森林年」と定め、FAOに加盟している日本やアメリカ、西欧諸国、共産圏、発展途上国など百五十六カ国が協力し、消えてゆく緑にブレーキをかけることになった。

日本では近ごろ、盛んに自然破壊が叫ばれているが、それでも全国的にみると、まだ国土の六十八%が森林で覆われている世界有数の森林国なのだそう。日ごろ、少し悲観的な報道に耳なれている私は、ちよつと意外な気がした。

国際森林年にあたっての海外での具体的な活動は、砂漠化、熱帯降雨林の緑を生態的に復元させる試験や、残廢材の再利用などの技術協力を積極的に展開させることだ。日本でも農水省、林野庁、外務省が協力、大がかりな植樹の国民運動を実施する。ほかにも木材の輸入先である途上国で、木材を切り出した後に植林するなどの努力をしてゆくそう。

私は、日本のこうした海外での森林復元活動や技術協力に大賛成だ。特に森林資源を輸入している国に対しては、そうすることが当たり前だと思う。他の国の資源なのだからどうなろうと関係ない、というのでは、あまりにも無責任だからだ。それが自然を利用して私達が負う当然の義務だと思う。

今、一番砂漠化が進み、深刻な問題を抱えているのは、おそらくアフリカ、東南アジア諸国だろう。樹木の伐採、焼畑農業の拡大、木材、同製品の輸出などの結果、干ばつが続く、植物の生態系までが狂い出している。消費一方で、生産をしようとしなかったことが、

今になってたまたたっているのではないだろうか。こんな現象が「アフリカの飢え」の大きな原因になっているというのも、うなずける話だ。

私達の身近には、幸いなことに深刻な自然破壊問題はないが、全国、世界に目を向けると、悲惨な状態が続いている地域がたくさんある。しかも、そのどれもが、人間の手によって開発された結果である。後々のことを考えず、目先の利益にばかり捕らわれていた人間が、結局、一番大きな被害をこうむっているのだから、これはもう、悪循環としか言いようがない。

それなのに、無駄な開発を繰り返す人間というのは、何てばかなのだろうとあきれてしまう。そのことが分からないうちは、いくら緑の回復だの、資源確保だのと叫んでも、何もならないだろう。それに早く気付いてほしいと思う。

前にも言ったように、私は日本や海外の国々が協力して緑を守るのは大賛成だが、それが変な見えや、自国の宣伝のためだけだったら納得できない。これらの国々には、効果的な、良心的な対策を期待したい。